

要旨

【目的】新人看護師に対し CBL による教育的支援を行った事例の様相を記述することから、新人看護師の臨床判断能力の開発に及ぼす影響を明らかにすることである。また CBL による教育的支援方法の臨床適用可能性についての示唆を得ることである。

【方法】2017 年 8 月に A 病棟一般病棟 B において、CBL による教育的支援を臨床指導者が新人看護師に行うことを支援する実習を行った。この実習における事例を観察、記述した。

CBL を行うための事前準備として、「Concepts for Nursing Practice」(Giddens, 2017) に記載されているコンセプトから、病棟特性に合わせ 13 種類を設定し、それぞれ学習ガイドを作成した。CBL による教育的支援は、Nielsen (2009) によって提案されている Tanner の臨床判断モデル (Tanner, 2006) を活用した学習ガイドを使用する手法を参考にした。

研究者は臨床指導者が CBL による教育的支援の実施中に、新人看護師と臨床指導者の対話をフィールドノートに記録した。新人看護師の様子については、Lasater Clinical Judgement Rubric (Lasater, 2007) の項目を用いて記録した。

実習終了後に、新人看護師、臨床指導者には個別インタビューを、学習ガイド作成に携わった先輩看護師にはグループインタビューを行った。

【結果】対象となった新人看護師は 2 名、臨床指導者は 2 名であった。CBL による教育的支援を行った場面は 9 場面あり、「呼吸」「炎症」「疼痛」「栄養」「患者教育」の 5 つの概念を使用した。

CBL を通して新人看護師は、状況と密接にかかわりながら、理論的知識を体系化し実践と結びつけたことで、膨大な情報のうち患者にとって何が意味ある情報なのかを把握できるようになり、その優先度の高いデータを用いて患者の状態を意味づけるようになっていた。また、脈絡と切り離されたタスクとしての行動ではなく患者の状態と結びつけて行動を考えるようになっていた。その行動に対する患者の反応を確認することと、プリセプターからのフィードバックをもとに自身の実践について省察し、学んだことを他の場面で転用させていた。しかし、主体的な省察は少なかった。

【結論】CBL による教育的支援は、新人看護師の臨床判断能力を開発する一助となっていた。臨床導入するにあたっては、知識の体系化を促す教育へとパラダイムを転換することが求められる。CBL を効果的に実施するためには、教育を担うスタッフへの支援を十分行うこと、時間的制約はあるが、活用するタイミングを工夫し段階的に CBL を行うことを検討することで課題の解決に貢献できることが示唆された。